

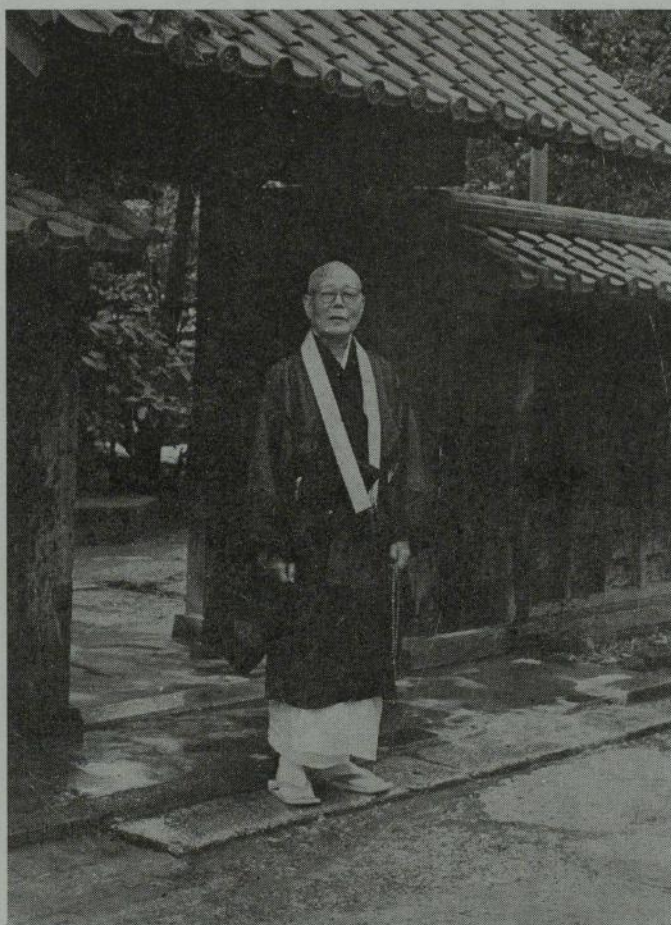
NO 160

# 全 仏

9/45.

悪を行う人は、砥石を磨するが如く、其の損するを見ずと雖も、日に欠くるあり。

(天台大師の語)



善を行う人は、春の園の草の如く、其の長ずるを見ずと雖も、日に増すあり。

(聖観音宗浅草寺貫主清水谷恭順猊下)

昭和45年9月1日

# 全仏は如何にあるべきか(二) 全一仏教運動の前進策

全日本仏教会の躍動こそ、現代仏教に生きる息吹きを与えるものである。前号より全仏の体質、組織の改革案を教界識者よりアンケートしたが、その所見は全仏当局をはじめ、各関係方面に今こそ全仏を再建しなければならないの意欲を横溢させつつある。今回もひきつづき一、全仏機構の改善二、全仏運動は如何にあるべきか三、現代における全仏の役割、について各師の所見を集録した。

## 全一仏教運動と全仏

神野 真一

(全仏組織専門副委員長)

### 全一仏教運動と全仏

教義の宣布は各宗各派それぞれ独自のものである。しかし、末端の各寺院では、仏縁の薄い者の入信の手びきには、宗派に派らず、根本仏教の教理を採り入れているところが多い。

この際全仏としては、

1 信仰への初歩的カリキュラム作製の責任者であるとの自負を固める。

2 根本仏教を基礎とした、平易な教化指標を作つて普及させる。

ことに努めるべきである。従来の試みでは、平易と普及に難があった。周知と実行には、是非とも県市郡の地域仏教会の力を借りよう努めることである。

次に、寺院自体の問題としても、

1 宗教法人法上の事柄は、県知事所管

であつて、宗派よりも、地域仏教会で対処する方が適当である。

2 財産上の問題も、経済基礎を同じくする地域共通の事柄が多く、地域仏教会の方が円滑に処理できる。

と思われる。この間に在つて、全仏は中央において、関係機関との折衝に力を与えなければならない。

これらは、全仏の在り方のほんの一例に過ぎないが、教化の面においても、権利擁護の面においても、全仏が地域仏教会の先頭に立つて、末端寺院の運営に力を尽すことになれば、各宗各派も、行政

上手薄な面の仕事を委託し、末派の興隆に資する意味において、大禮那の大度量をもつて、一カ寺四、五百円程度の負担はして戴けるものと確信する。

現在の倍の予算が編成できれば、関係者も肩身の狭い想いをせず、全一仏教運動に挺身できる。

全仏機構の改善

x x x

全仏機構の改善

与えられた紙数も少ないので、所信の一部を簡条書きとする。

1 役員は、多額負担宗派の宗派内人材のみに限らず、広く加盟団体中から適任者を推薦するようにしたい。

2 理事長は、他に常勤の役職を持たない、専従できる方が望ましい。

3 事務総局の職員は、すべて有給で専従であることが望ましい。常勤者の給与体系を一般企業に準じて整備する反面、服務規定の遵守を厳正にする。

4 勤務不良の職員には、辞職を勧告できよう改める。その基準の決定は理事会の決議として、勧告の際のトラブルを避けなければならない。

x x x

最後に付け加えたいことは、全仏は日本仏教界の国際的代表であるとの自覚を高め、常に適任者を担当者を迎えるよう心掛けて貰いたいものである。

x x x

現代の課題にこたえる全仏

白川 良純

(全仏文化専門委員)

1 全仏機構の改善について

事務局、理事会、委員会等の制度によつて運営されている現在の制度を簡単に

変えることはできないと思われ。全仏は獨創性を發揮できる事業団体ではなく、各宗派の共同事業であり、それぞれ深い信仰を持つ各宗派に支えられながら、かつそれを伸ばすようなものでなければならぬという。きわめてむずかしい課題を与えられている全仏としては、

いろいろな制約に縛られて、活潑に運動を展開することは至難のことである。

しかし、そういう中であつて、第2項以下のような使命を果たすためには、現在の事務局の構成では余りにも人手不足であると思われる。

委員会制度を十分に活かし、全仏教界の英知を集めて、適正な運動を展開すべきであるが、何といても事務的処理が適切に行なわれなれないといふような問題を起して来るし、基本的な立案は事務局において纏められ、その実現は事務局が推進しなければならぬのであるから、人員の充実や給与の改善によつて、十分に機能が發揮できるようにするのが急務であると考える。

2 全仏運動は如何にあるべきか。

各宗派の独自の信仰を尊重しつつ、仏教の基本的立場をつねに明らかにしていくのが、全仏運動であると考える。

とかくセクト主義に陥り易いのが、宗教の通弊と思われるが、仏教の根本を明らかにしようとする努力してきた。明治以後の仏教徒や仏教学者のせつかくの努力の裏を無駄にしてはならない。

襟度を開き、もっと柔軟性をもつて、変転極まりない社会の動きに対応して行かなければ、全仏運動の意味もなければ各宗派も細ってしまうのではないであろうか。

3 現代における全仏のはたす役割について。

人間回復が叫ばれ、精神生活の充実が切望されているが、仏教が十分にこれにこたえているとは思われない。

仏教書や仏教音楽のレコードが静かなブームを呼んでいるとも言われるが、文化の根幹において、仏教の立場が明らかになされていないと思われる。仏教徒としての責務の重大さを感じる次第であるが、全仏としても天稔的な問題に精力を分散するのをできるだけ避け、大処高処から現代の課題にこたえて行くべきであると思う。

### 初心にかえって

島田喜久子

(全仏文化専門委員)



一、全仏機構の改善について

そもそも全日本仏教会は、わが国の仏教界を統一して、全一仏教運動

を強力に推進するために生まれたものと伺っております。何事も結成当初は希望に満ち、全員団結して歩き出しますが、年を経るに随って、仕事も軌道にのり、馴れてきて、よくいえば充実、悪くいえばマンネリズムになるのが世の常でございます。学校などでも、創立者の時は、すばらしい理想に燃えて充足しますが、生徒が増え、建物も立派になり、(全仏にまだ会館はありませんが)時代が変る

仏

と自然に精神が薄れて行くものでござい  
ます。全仏も発足して十七年、財団法人  
になって十三年との由、代々の会長様始  
め、理事長、事務総長、他役員の皆様  
が、今迄一生懸命なさっていらつしやっ  
たことと存じますが、この際初心にかえ  
り、心を新たに再検討するときがき  
たような気がいたします。ただ全仏の性  
質上、大変むづかしく、いうは易く行  
うは難しで、どなたがなさってもやり  
にくいことと存じます。根本問題を改善  
しなければ、機構いぢりだけしてみても無意味  
ではないかと思ひます。

二、全仏運動は如何にあるべきか

総合的な教化運動を示し、それが末端  
にまで行き渡って実行されるよう、全仏  
の密附行為に掲げてある事業の目的を思  
實に達成するよう努力したら如何でし  
うか。

三、現代における全仏のはたす役割に  
ついて

加盟団体ももっと真剣になって下さる  
ように働きかけ、困連における拒否権的  
な事が行われないよう、跡を継ぐ若い人  
たちも充分に活動でき得る場であるよ  
う、勿論、各宗派やセクトを超越して、  
時代に適した運動が展開できる組織を作  
ってあげたらと、思ひます。

### 仏教を大衆に

植松 威

(全仏総務専門委員)

(一)について

全日仏には、宗派・都府県仏教会、仏  
教諸団体があるが、檀信徒のグループが  
ない。仏教は僧俗一体であると思うの  
で、檀信徒も包含しなければならぬの  
ではないかと思う。

昭和四十二年の岐阜大会の特別部会  
の答申にも「仏教大衆を総動員した組織の  
出現を要望する」といっているが、その  
答申が具体化しているであろうか。現機  
構の中に、この答申を生かして「檀信徒  
局」を設置して、死んだらお寺さんにお  
葬式を頼むのでなく、仏教は生きている  
人の仏教であることを、教えるようにす  
ることが急務と考える。

(二)について

全日仏の運動が「日本仏教徒会議」と  
「文化会議」が主な行事となっている  
が、もっと全一仏教的な運動を、国民大  
衆の中に行って行かなければいけないの  
ではないかと考える。

全一仏教運動は、各宗派にさし障りが  
あるかも知れないが、それを考慮して、  
仏教教典である「大蔵経」の普及運動を  
行ったらどうであろう。

昭和重修大蔵経でも南伝大蔵経でも世  
の中一般の人は案外知っていない。大蔵  
経の内容を紹介しながら、大衆の中に這  
入って行くことは、宗派にかたよらない  
し宗派も好むところではないだろうか。

東洋の心のふるさと、大蔵経を、世の  
中に知らしめることは必要で、「大蔵経」  
の文献を集めたらどうであろう。

(三)について

日本人はこの頃、エコノミアニマルと  
世界の人からいわれている。残念なこと  
である。でもいたし方ないと思う面もあ  
る。日本人の仏教についての関心が薄  
いからである。曾って総合雑誌の特集で、  
財界人に宗教に対して関心の有無をアン  
ケートしたところ、宗教に関心を持って  
いる人が少かった。これではエコノミア  
ニマルといわれてもやむを得ないかも知  
れない。

全日仏は仏教界唯一の全国組織である  
ので、宗派的なことも必要であるかも知  
れないが、日本人に仏教を教え、堂々と  
わたしは仏教信者ですと胸を張っていえ  
るよう。またいうよう仏教の何たるかを  
知らせる運動を大いに興さなければなら  
ないのではないかと考える。

仏教を大衆の中に生かさう、これが全  
日仏の運動ではあるまいか。

### 時代即応の運動を

半田 孝淳

(長野県仏事務局長)



一、全仏機構の  
改善について

今や全仏機構の  
改革はせまられて  
いると思う。全日  
仏会長及び理事長

始め各役員を推挙する場合、大きな宗派  
に遠慮し交替制で職責を果すようなシス  
テムでは強力なる運営は困難である。な

るほど仏教の近代化を推進する上において宗派仏教から脱却することは至難であるが、宗派仏教の欠点を補いながら全一運動をすすめるシステムを考えるべきではないか、即ち全日仏は各宗派を統一した見解をもち各宗派をリードし得る立場で働きができる組織機構体制に改める。そしてあくまでも全日本の見地から適切な人物を探し求め、全智全能をふりしほり仏教興隆のために全仏の全面的機構をつくることである。これには当然経済的な基盤が必要で、各宗派の本山より多額の費用を捻出して貰うことは勿論、一般大衆特に仏教に関心をもち、信仰の強い人々を導入し、僧俗一体となった組織の下で経済的基盤を確立しなければ全仏機構の改善は望まれない。

二、全仏運動はいかにあるべきか  
経文の統一とか、総合仏教大学の設立、全日本仏教会館（事務局併設）の新設、孝道教団が提唱されている国際仏教交流センターの拡大強化など、全仏運動をフルに展開し得る施設を構する必要がある。

三、現代における全仏のはたす役割について  
都道府県仏教会との連絡を緊密にし指導的立場で地方の実情に即した運動をおこし、特に若い世代の人々に呼びかけて刻下の重要課題たる交通、公害などの諸問題の研究に取りくまれることを切望するものである。これこそ仏教本来の最たる役割ではないだろうか。

### 根本的な機構改革を

壬生 照順  
(全仏国際専門委員)

五千万人以上もあるわが国の仏教徒を結果する全日本仏教会となるためには現在の機構を根本的に改めるべきである。

現在の仏教会は既成宗派の重役たちのクラブ機関であって、全仏教徒の意志が反映されていない。従って会則にうたうところの全一仏教の運動機関ではない。現状のままならば完全なクラブとなってしまう。年一回の全国仏教徒大会も、実質的には地域仏教会の有志の会議であって、全仏教組織と仏教徒代表の会議ではない。かりにその会議で決議しても執行の責任はなく、常務理事会が執行機関であるが、実質は執行しない機関となっておるの現状である。

例へば「靖国神社国営化反対」をきめても一片の声明文は出すが、全仏教徒に実行を促すことはできない。下部の組織である宗派にはそれぞれ独立の意志があり、上部の指示では動かない。決議しつばなし声盟の発表しつばなしである。

また、隣邦インドシナには日本仏教徒を含めて全世界の仏教徒にとって死活の大問題が起つておるのに正確な情報も得られない。ただ傍観しておるにすぎない。批判も、対策もしない。ある有志団体だけが和平なり救援活動なりをしておるだけである。

現在の全仏には、このような日本仏教

徒の重大課題を処理する最高指導機関がない。

具体的には宗派、地域、男女、僧俗、各種機関や各種学術研究機関、国際情報機関まで網羅する権威ある指導機関の設置が必要である。

必然的に現在の数十倍にあたる経費がともなうが、それには新財団を作ることで、その一部には全仏教徒が購読する有力週刊紙（できれば日刊紙）を発行し、機関紙代を財源にすることも一方法である。

従って教億の予算を計上した本部機構を確立する。僧俗の専門家や、第一級の仏教指導者を局員とする常設の国際、時局対策、情報宣伝などの部を設置し、緊急問題にも対処できるように改革する。

勿論全仏教徒の参加とは既成宗派だけに固定せず、新興諸宗派（例へば立正佼正会や妙智会解脱会等）などの参加も考慮する。全国の地域仏教組織の拡充強化を図り、その代表を中央の幹部に選出するなどの組織作り数十倍の努力をすることが必要である。紙教の関係が大綱だけになったが先輩たちの叱正をお願いする。

### 宗派意識を超えて団結

川田 聖見  
(茨城県仏会長)

全仏の機構改善、全仏運動のあり方など今頃になって世論を求める。如何にも全仏らしいと思うが、或はこれは、事

務当局の賢い方法とも受取れる。執行責任者である善の常務理事会が、自らの性格と使命を忘れたような現況下においては如何なる機構改善も、全仏運動の新構想も意味のないものになり終るのではないか。全仏が今、最も緊急の大事は（イ）資金源の確保と（ロ）執行部の頭の切替ではないだろうか。要するに全仏の体質改善でこれなくしては、机上の空論。名論卓説のカラ回りに終ってしまふ。

（一）特に強調することは、現行拠出金方法の検討と、これに加へて財界、政界、民間、檀信徒。つまり全仏運動の理解を広く、深く求めて確固たる資金源を確保することにあると思う。

（二）次に人事面、会長、副会長、理事、常務理事、事務責任者の選衡である。全仏の役員は単なる名誉職の観念を捨て、全一仏教という大使命遂行に悦んで情熱を傾ける人材を選ばねばならない。このためには因襲と情実を勇断を以って夕子切り、広く野に遺賢なからしめるよう宗の大小にトラウレサ全仏教界から適材を求めねばならない。大宗団もこれが実行には、虚心と度量を示して、識者の鑒覽を買う如き愚は避けねばならない。

凡そ人事の困難性は誰人も認めるところ、まして寄合所帯の感ある全仏には、これ程、むづかしい問題は外にないと思ふ。だがこの難問題が適正に行われ得ないのであったら、百年清河を俟つの外はない。しかもまだ教界には隠れた人材が充分にある筈だ、よろしく拡大鏡を用い



杉谷 義純

(全日本仏教前理事長)

全日本仏教会が今まで果してきた役割は決して少なくない。しかし昨今全仏に対する批判の声が次第に強

て発掘すべきである。但しその人材とは  
(A) 企画性に富み、(B) 実行力あり、  
(C) 巾広く、深く、人間味豊かなる者。  
以上が選衡の基準である。

(2) 次に現在の各種専門委員会の整理  
改変である。私は新に資金源確保のため  
の専門委員会。檀信徒会の結成と運用を  
計るための専門委員会。全仏機構改革に  
就ての専門委員会。以上三つの専門委員  
会を新に設けるよう、提唱する。

これを要するに教団人全体が全一仏教  
運動の必然性を知って宗派意識を超え、  
仏教徒の強い団結を盛り上げねばならな  
い。仏教々師は無気力で、団結力がない  
とわれらを軽視して、仏教々線の攪乱を  
強化する新興宗教は断乎排撃せねばなら  
ない。

全日本七万の寺院、十三万の教師、八  
千万の檀信徒、融合一体となって教祖の  
信仰を中心に大同団結を強化する秋は、  
今日を、おいてないことを銘記すべきで  
ある。

### 仏教シンク・タンクの設立

くなっているのは何故だろうか。これは  
単に大宗派中心で小宗派の意見が余り反  
映されないなどという、全仏運営技術上  
の問題だけではなく、全仏の根本にかか  
わる問題から考え直し、思い切った改革  
をしない限り解決を見ないであろう。そ  
もそも全仏の性格が非常に不明確なこ  
ろに、その存在は否定しないものの、積  
極的な利用価値を認めない傾向がでてく  
るのではなからうか。すなわち多種多様  
な加盟団体をかかえての宗派や仏教諸団  
体相互の連絡機関であると同時に、全仏  
大会や文化会議を催す実働団体的性格も  
兼ねそなえている。だが本来事務局に連  
絡協議会的事務能力と予算しかなないとこ  
ろに、実働団体としての仕事を加えるた  
め、全仏大会は「決議倒れ大会」という  
汚名をかぶせられることになってしま  
うのである。そして辛うじて全仏のかかけ  
る「超宗派」という錦の御旗におつき合  
いをしていくといった感じしか残らな  
くなってしまふ。おつき合いです以上そ  
こに積極性がないことはいうまでもな  
い。それでは一本どうしたらよいであ  
ろうか。

原因になっているからである。全仏教界  
的視野の持主として衆目の一致する人が  
いれば、如何なる団体に所属していよう  
とも推選することが肝要であろう。そこ  
に柔軟性がでてくるのだと思う。又全仏  
に附属する各種委員会のメンバーをもつ  
と権威あるものにすべきである。今のメ  
ンバーは、中には秀れた人もいるが、ど  
ちらかというといわゆる全仏の周辺の狭  
い範囲から選ばれていて、全仏教界の輻  
智を結集しているとは言いがたいのでは  
ないかと思う。秀れた人材を集めることも  
権威確立の一法ではないだろうか。

しかしながらこれだけでは根本問題の  
解決は困難であろう。全仏は一体何をす  
るところなのか、今一度考え直して出発  
する必要がある。そこで私は、多少の飛  
躍があるかも知れないが、特に科学の時  
代といわれている二十世紀後半に、未来  
を先き取りして人間回復のために仏教々  
団が何等かの歴史的役割を果せるか、と  
いう観点に立って全仏というものを考え  
直していくべき時が訪れていることを  
痛感するのである。今日のように情報が  
氾濫している時代に仏教々団が時代の進  
歩に対応できず立ち遅れを見せているの  
は、仏教界が情報の収集とその分析能力  
に著るしく欠けているからである。それ  
故人間疎外に救済の手を差し延べるとこ  
ろか、既成教団自体が疎外され特殊社会  
に下落しつつある。そしてなおさら時代  
の問題を正しく把握し、それに取り組む  
姿勢と意欲が欠落していくのである。こ

### 所信の断行を求む

日野 照護

(前全仏総務局長)

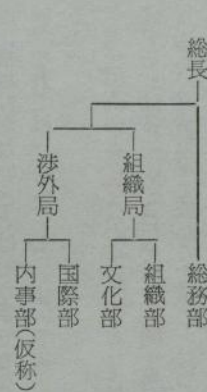
の状況を打破して行くには、まず個々バ  
ラバラな頭脳とお金を結果しなければな  
らない。すなわち相当な頭脳集団と経費  
が必要となってくるのである。それ故も  
はや一つの教団で解決のつく範囲のこと  
ではない。そこで超宗派的団結をもって  
仏教シンク・タンクとでも称すべきもの  
の設立が要請されてくるのである。これ  
は教団の一種の技術提携であり、この機  
関の提供する情報の活用は、各教団の教  
儀の真付けをしてそれぞれが用いられよ  
い。正確で、時代の鋭い分析に基づく発  
言は、次第に社会的影響力を回復して行  
くだろう。ここに全仏教界が団結によつ  
て今までにないものを生み出す契機があ  
る。今後全仏的機関が単に自己満足的な  
ものではなく、社会存在として意義たら  
しめるには、まさに上記したような機関  
に生まれ変わることが最大の条件であ  
ろう。五十年、百年後の教団存立の基礎を  
考えるならば、上述のことは飛躍でも不  
可能でもない。そうしない限り、われわ  
れ仏教徒はただ後退していくという事実  
の前に投げ出されるだけなのである。

と微温的な事勿れ主義とが、相当に体質化されていますので、この辺で体質改善が計られて当然でしょう。併しこうなった原因の主たるものは、事務当局の加盟宗派団体に対する遠慮と、加盟宗派団体の全仏そのものに対する関心の薄さ、結局は寄り合い所帯ということでしょう。事務当局が右顧左眄することなく所信を断行できてこそ、始めて全仏も前向きな姿勢がとれるというものです。

それには先ず経済的に自営できる形をとらねばなりません。加盟宗派を通じて所属寺院から一口二〇〇円の寄捨を仰げば、四五階位の小ビルなら建てられる資金が集まります。その一階を事務局が使用し他の階の室の賃賃料を運営資金に充当するのです。尤もそんなことなら前から考えているといわれるかも知れませんが、切角改革の必要さを理事者側から要請された得難い好機です。これが実現に理事諸師及び事務局、特に最高責任者たる理事長の大死一番を切に望む処です。

事務局の機構については、四年間全仏に在籍した経験から思いますと局長制は寄り合い所帯の感覚から発想されたいわば政務次官的な名誉職であって、そんなに必要な職制ではないようです。思い切ってこれを廃して、常勤の事務総長と次長を置き、別に十大宗派から総務(仮称)を出し、毎月その会合を開き運営についての諮問をしたり、それぞれの宗派との連絡をしてもらったら宜しいか

と思います。  
また局長制を存続するのでしたら、一部制をとるのも一法かと思えます。一例を挙げれば



内事部は全仏の加盟団体以外の諸団体、個人或は諸官省との交渉、選挙や税金墓地問題など国内の渉外事務を担当するものです。総務部は総長直屬とします。局長も常勤にして事務に精励してもらいます。現在のような非常勤の局長、常勤の部長、主事、計三名の一局では、局長の存在価値が薄いのには自明の理です。

しかし機構はいくち改善されても、それに当る人々が日和見のであったれば結局元の李阿弥です。事務局の経済的な独立からの自主性堅持と、加盟各団体の積極的な関心こそ、全仏にとって最も肝要な課題であるといわなければなりません。

全仏の前進策について御意見を賜わり厚く御礼を申し上げます。事務総局では各師よりの御意見を参考に再建、前進態勢の具体化を進めております。今後とも御指導、御支援を切願いたします。

「全仏」編集 文化局

### 全仏制度調査委が決定

現在、諮問案を作成中

全仏の前進をはかるための機構改善を審議する全仏制度調査会が、このたび常務理事会で承認され設置されることになった。委員は(順不同)

- 芳賀達宗(曹洞宗総務部長)
  - 春田義正(真宗大谷派総務部長)
  - 藤田説量(前浄土宗総務局長)
  - 伊藤勝淳(日蓮宗々々議員)
  - 寿山良知(高野山真言宗々々議員)
  - 児玉文礼(監済宗妙心寺派宗々議員)
  - 宮田肇啓(天台宗庶務部長)
  - 別所弘因(真言宗智山派総務部長)
  - 浅井堅教(真言宗豊山派総務部長)
  - 郡司博道(東京仏教連合会事務局長)
  - 丸山日雄(神奈川県仏常務理事)
  - 田中享三(静岡県仏会長)
  - 山本 杉(全日仏婦理事長)
  - 真澄義貫(全仏各専門委)
- 以上の委員によって構成されたが、第一回の委員会は現在、事務総局において諮問案が検討されている段階であるので十月初に開催が予想されている。

### WFB常任理事会

セイロンで開催

(既報)

世界仏教徒連盟常任理事会は十月三日にセイロン国コロンボ市で開催されるが全仏では全日本仏教徒会議新潟大会と開催日が接近しているため稲田理事長の代理として石井真峰師(全仏国際委員)が出席することに決定した。

## 浄土宗全書

—日本仏教の成果 浄土教のあけぼの—

- 予約申込規定 全四十二巻予約申込者のみに限り出版します。
- 定価 各巻 2,000円/特価 全四十二巻一時払80,000円/申込期限/昭和45年7月末日 ※内容見本進呈※
- 刊行 期日 昭和45年4月第一巻好評発売中・第二巻5月配本・第三巻6月配本・毎月一冊刊行
- 御申込みは大正大学浄土学研究室・仏教大学浄土学研究室・右記発売元又はお近くの書店か浄土宗宗務支所にお申込み下さい。

★おわび—解説・執筆者塚本善隆先生ご病気の為2回配本が遅延いたしましたことを、ご購入者各位に深くおわび申し上げます。

発行所 浄土宗開宗八百年  
記念慶讃準備局

総発売元 山喜房仏書林

東京都文京区本郷5-28-4東大赤門  
前 TEL03-811-5361 振替 東京  
1900

# 転法輪

## 諸宗教の協力による

平和確立の可能性

人類とは何かということとはなかなかむづかしい問題である。しかし、少なくとも従来のような哲学者の頭の中で存在する観念的なものではなく、現実はこの地上の対象物としての存在であり、未来社会の人類は共同体的な存在として把握されねばならない。従って人間の幸福とは個人的なものではなく、人類の全体的関連において実現されて行くものでなければならぬ。だから人間の幸福が実現されてゆくためには、人類共同体の形成が必要であり、その共同体そのものが、全体的人間の可能性を実現してゆくものとならなければならない。

宗教はつねに人間の幸福のために存在すると主張されている。そしてその目的は如何なる宗教にも共通した要素であるという。果してそうだろうか。宗教のゆえの幾多の戦いは歴史に示すところであり、今日でも異教徒間の戦争は絶えることがない。そしてまた、宗教の力によって戦争を防止し得たという例は極めて少ないのはどうしたことか。お互に殺し合っている相手が同信の間柄であることも屢々である。このような事実をいやといふほど経験してきたわれわれが、宗教の

協力によって平和を確立しようとする諸々の運動はいかにもむなししいもののように感じない訳にはゆかない。現在世界の到るところで戦争が行われているが、その中には異教徒間の対立抗争を原因とするものもあるし、同信間で殺し合いを展開しているものもあるけれど、これに對して宗教の力はほとんど無力である。宗教による平和は永い間叫ばれているし、今また巨額の費用を投じて諸宗教協力による平和確立が話し合われようとしている。尤論決して無駄なことではない。ただ一片の声明や、決議や、そして観念論的な言説の開陳だけでは何の役にも立たないことを痛切に反省してかかることが大切だと思ふ。終戦後間もなく、日本の宗教界は戦争を防止し得なかつた無力を自己批判し、宗教平和会議を開催した。しかし、その後果して一貫した態度で戦争防止、人類平和のためのどのような活動が続けられているかを顧みてまことに汗顔の思いである。

人類の幸福が保証されるためには人類の共同体が確立されることが必要であるといったが、それには何よりも平和が絶対的な条件であり、この意味でも戦争は人間の共同体を破壊し、人間を疎外するものであることはいままでもない。だからこそ反戦運動というものが最近強く展開されている。ところが、一方この反戦運動に對してこれを抑圧する運動も繰り上げられている。人間の幸福のためには平和が絶対的条件であり、戦争はこの平和

を破壊するという一見筋の通った論理に對して必ずしも簡単にそうはゆかないところに問題の困難さがある。つまり絶対平和ということには何か、一種の矛盾が含まれているように思われるからである。例えば植民地解放や、民族独立乃至民族の独立をおびやかす不当な侵略を反撃する戦争をと暴力行為として否定するなら、民族独立、植民地解放の当然な道義をも否定するという結果の矛盾などがこれである。この地上から一切の戦争行為を絶滅させるという絶対平和論は、理念としては正しいが、現実的には矛盾に遭遇せざるを得ない。このような理念と現実的な矛盾を、諸宗教の協力でのどのように解決しようとするのか。また果してその可能性があるのだろうか心配である。

現生哺乳類中でもっとも発達した大脳を持っている人間は、高度な抽象機能を備えていて、「未来」について考える指向性を持ち、且つ、現在を乗り越えてゆくこうとする本質的なメカニズムが与えられているといわれている。そして宗教はこの未来の予測について、それぞれの時代を背景にラジカルな問に對するそれぞれの答えであるともいえるのではない。しかし、このそれぞれの答も、ここ一、二を祀にわたる科学や、科学技術の発達で順次破壊されつつあるし、特に興味ある問題は、前七世紀に出現したゾロアスター教は、人間は悪と戦う善の戦士である。基本的な思想を持ち、これがの

ちにユダヤ教、キリスト教、イスラム教を生んでいったと思われ、マルキシズムでさえもプロレタリアートによる最終革命は、ゾロアスター教のバスターに影響されているように思えることである。一方インドを中心にして発達した未来思想としてヒンズー教や、これを批判する立場に立つ仏教の輪廻転生の中に生きる業の法則や、梵天の原理は、ゾロアスター教と全く対蹠的であつて、それは絶対的現象論を通じて絶対的虚無にいたるバスターである。そしてこれはマルキシズムがゾロアスター教バスターにあてはまると同じように、現代の物理学が究めつつある宇宙像が仏教的バスターに似ている。ここでは単にゾロアスター教的宗教と仏教だけを例によつたにすぎないが、全くバスターが異っている未来観に立つ諸宗教が人類の幸福のために必要條件とする平和をどのようにして協力すれば全体的人間を確立する環境としての共同社会を建設し得るのか。諸宗教の未来思想を調整することなしにはむづかしい問題である。それには先づ科学、特に進化論を擁する宗教へと脱皮する以外はない。さらにいうならば生命の起源、従つて生命の同根を認識することから出発する以外はない。そしてこれらの基本問題を検討しつつも現実の面でも人類平和の確立に寄与するために、諸宗教のヘッドコーターの国際宗教連盟といった組織の創設が必要ではないか。

# 第三回シンポジウム

## 「アジア開発と仏教」



「チ」の基調講演がおこなわれた。東西よりアジア問題を主体とした学人関係者約六十人が参加したが、全員より熱心な意見が述べられ成功裡に終了したが、この内容については前回と同様に事務局において紀要を発刊するので参考にされたい。

出席者は奈良教育大教授阿部正雄、名古屋工大教授池田長三郎、静岡大元教授石井真降、京大教授石井米雄、一橋大教授板垣与一、東洋大教授勝又俊教、東洋大教授金岡秀友、同金岡昭光、東大教授川野重任、大谷大教授雲井昭善、相模工大助教授佐伯真光

### 仏教界の動き

(ニュース・投稿を歓迎します)

日本仏教文化会議(宮本正尊議長)の「アジア開発と仏教」のテーマによる第三回シンポジウムは八月三十、三十一日の二日間、神奈川県箱根の仙石原、花園ホテルで全仏と国際仏教交流センターの共催で開かれた。

本年はこのテーマによるシンポジウムの一応の結論をだすことになってをり、政治、経済の立場からの論及の必要性から一橋大教授板垣与一経博の「アジアの政治経済の近代化と宗教」が論じられた。仏教の立場よりの総合的結論をひきだすうえから東京大教授中村元文博により「アジア開発の仏教精神構造論的アプロ

### 常務理事会開催

全仏常務理事会は八月二十日午後二時から築地本願寺において開かれた。

出席者は稲田理事長、太田、下川、田中、高橋、栗本、片山、築山、伊藤、芳賀、深田の各常務理事、事務総局各局長部長全員が出席した。署名委員に下川高橋両師を選出し左の各号について審議した。

一、財団法人全日本仏教会制度調査委員会委員選出については屋上屋を重ねることのないよう充分配慮することとし、宗派から十名府県仏教会三名団体一名その他一名を選出した。

二、職員任免については、組織局主事福井清俊の退職(七月三十一日付)書記鈴木美貴の退職(八月三十一日付)を承認した。なお福井清俊氏の事務嘱託を承認した。後任については日蓮宗から推せんされる予定。

三、万博終了時における法輪閣の処分については、万国博参加実行委員会の建築委員に処分委員会の委員を委嘱して検討することとなった。

四、参議院議員選挙については、明年七月の選挙に際し適任者の推せんを行うが会名を以て法定の運動をすることとした。

五、セイロンで十月三日に開催されるWFB常任委員会の代表派遣については理事長に一任となった。

#### 報告事項

一、全日本仏教徒会議新潟大会開催に

ついて報告を了承  
二、日本仏教文化会議開催についての報告を了承して散会した。

### 万国博参加の

#### 「法輪閣」を払い下げ

全日本仏教会が万国博に施設参加した「法輪閣」は閉会と共に全仏加盟の団体個人に払い下げられることが過日の常務理事会で決定され、その処分委員会(鶴岡隆玄委員長)が九月二日、京都知恩院で開催された。

この法輪閣は週刊読売九月四日号にも「仏教パビリオン」として紹介されたように開会以来、連日五千人から一万人の人々がやすらぎの場を求め接待のお茶に休息を喜んだ施設である。払い下げの対象としては日本仏教界のシンボルとして参加した意義を尊重しての使用途に重点がおかれ、選考は処分委員会が公正におこなうことになっている。その委員の顔ぶれは(委員長)鶴岡隆玄(委員)小笠原彰真、山崎秀明、竹中素仁、江西寛堂、山家恵誠、間野敬重、佐藤寛雄、伊藤哲雄の各師であり、処分については各加盟団体に告示が発表された。

### 計 報

長井真琴師(全仏元副会長、元東大教授文博)全仏創成期の副会長として日本仏教界の全一仏教運動の元老的存在として指導力を発揮してきたが去る八月八日午前三時五分、尿毒症のため日通病院で遷化された。享年八十八歳。